

『米欧回覧実記』と「脱亜入欧」

— 田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』
（北海道大学図書刊行会，1993年）をめぐって —

西 川 長 夫

はじめに

北海道大学で10年に近い歳月をかけて行われていた『米欧回覧実記』にかんする共同研究の成果が、この三月によりやく刊行された。B 5 判552頁、ずっしりと重い大著である。この書物は『『米欧回覧実記』の学際的研究』というタイトルが示すように、一つの総合大学のさまざまな学部からさまざまな専攻領域の研究者が参加して行われた、わが国ではきわめてまれな学際的共同研究の成果であるが、同時に長年にわたって岩倉使節団とその報告書である『米欧回覧実記』の研究に専念され、この領域の研究のイニシアチヴをとってこられた田中彰氏の研究における一つの区切りと総括を示すものとしても、注目すべき重要な書物である。私は以下に、この書物のとりわけ「総論」において提起されている諸問題をいかに考え、それにいかに応えるべきか、という観点から私なりの意見と感想を記したいと思う。もっともそのような論じ方がこの書物の全体的な価値に必らずしも対応していないということは十分自覚をもっているつもりである。例えば、最近『米欧回覧実記』の理科学的側面について、きわめて精力的な研究を進めておられるもうひとりの編者の高田誠二氏のお仕事について、私はこれまでも深い興味をもって読ませていただいていたが、ここでそれを評論するだけの力はない。その他にも農学や建築や技術史など、私の領域をこえる部分は多い。そしてそのことは、田中氏が指摘するような『米欧回覧実記』のエンサイクロペディア的性格のしからしめるところであり、また学際的な研究を必要とする理由でもあった。学際的研究には学際的研究にふさわしい論評の形式が必要だろう。

したがって以下の小論はいわゆる書評ではなく、書評の形をかりた一つの感想、あるいはこれから続けられるべき議論の発端であると考えていただきたい。このような記念碑的労作に対しては、さまざまな形の反響があつて当然であろう。私は『米欧回

覧実記』にかんしてこれまで自分が抱いてきたさまざまな疑問を解きあかし、あるいはこの時代とこの使節団についての自分の考をふかめるための案内の書としてこの研究書を読んだが、そこでふたたび生じたさまざまな疑問についても正直に書き記しておきたいと思う。

I 紹介と批評

1. 構成

田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』は「総論」と三つの編から成っている。この田中彰氏執筆の「総論」については後にくわしく述べることにして、ここでははじめに第1編と第2編に収められた個別論文の目次をかがけておこう。

第1編「実録の書としての『米欧回覧実記』」

- 1 アメリカ西部の『岩倉使節団』……シドニー・D・ブラウン（太田昭子訳）
- 2 大英博物館を見たふたつの東洋——『米欧回覧実記』と『環游地球新録』……武田雅哉
- 3 岩倉使節団のイギリスにおける岩塩礦見学……羽田野正隆
- 4 岩倉使節団とベルギー——1873年の先進重工業国ベルギー……石坂昭雄
- 5 岩倉使節団とロシア……外川継男
- 6 ベテルブルグの岩倉使節団関係新聞記事……中村健之介訳・紹介
- 7 デンマークにおける岩倉使節団——『米欧回覧実記』の歪み……長島要一
- 8 日本におけるガリバルディ神話……北原敦
- 9 「コントラ」島小考——『米欧回覧実記』の死角……中野美代子
- 10 『米欧回覧実記』と日本酒造業……長岡新吉
- 11 『米欧回覧実記』に現れる度量衡……高田誠二

第2編「洞察の書としての『米欧回覧実記』」

- 12 『米欧回覧実記』における動物園見学記録と動物観……中野美代子
- 13 岩倉使節団と西洋技術……遠藤一夫
- 14 『米欧回覧実記』と久米手稿『物理学』……高田誠二
- 15 明治維新における泰西農業の導入過程……高井宗宏
- 16 近代日本における西欧建築の受容——フィンランド、ハンガリー、スペインとの比較……越野武
- 17 岩倉使節団における宗教問題……山崎渾子

- 18 岩倉使節団と明治初期の宗教論……マーチン・コルカット（山崎渾子訳）
19 留学生と岩倉使節団……青山英幸

以上の19篇の論文のタイトルと著者の名前のリストを一読するだけでも、この『学際的研究』の規模の大きさと多様性、さらにはそれをまとめる統一的な視点の困難さが容易に想像される。所収論文を「実録の書」と「洞察の書」の二編に分けたところに、すでに編者の『米欧回覧実記』に対する基本的な見方が現われている。つまりここでは「一種のエンサイクロペディア」を認めて「実録」の書としての『実記』に照明をあてると同時に、東西比較論的観点からの欧米文明に対する「洞察」の書としての側面が注目されているからである。もっともこれは初めから意図された区分というよりは、おそらく集められた諸論文を見てからの区分であって、分けられた論文がすべてその場所で座りがよいとは限らない。また、こうして一覧表にしてみれば「コントラ島」や酒造や物理学といった思いがけない新鮮な視点が提供され、またロシアやベルギーについての興味深い論考が置かれている一方では、重要な訪問国であったフランスやドイツにかんする論文が欠けているといったアンバランスも見てとれる。だがこのアンバランスを本書の欠陥として言いたてるのは正しくないだろう。本書は「学際的研究」であって、別に「総合的研究」と銘うっているわけではないし、むしろこれだけの特色ある論文が集められていることを高く評価すべきである。それに個別論文でおおいきれていない項目の多くは、「総論」でかなりの部分がおぎなわれている。

本書のもう一つの特色は、第3編「『米欧回覧実記』索引」にある。ここには、1. 『米欧回覧実記』地名索引（羽田野正隆）、2. 技術関連項目解説分類集成（吉田文和、遠藤一夫）、3. 農業関連項目分類集成（高田誠二）、5. 岩倉使節団回覧日程表・経路図（羽田野正隆）、それに関係文献（山崎渾子）などが収められている。これは製作の作業もたいへんな苦労があったと推察されるが、『米欧回覧実記』の読者や研究者にとっては便利で実にありがたい部分である。

2. 研究史

さてここで「総論」にもどって内容に立ち入ることにしよう。「総論」は研究史を概観した第1章、使節団のメンバーの特定、および「米欧回覧」の諸特徴とアジア観にかんする第2章、『米欧回覧実記』の報告書としての特色や編修者久米邦武にかんする第3章、そして各種索引その他にかんする第4章から成っている。

岩倉使節団と『米欧回覧実記』の研究史は大きく戦前と前後に二分され、戦後の研

究史はさらに、第1期1945～60年、第2期1961～75年、第3期1975～現在、の3期に分けられている。田中氏によれば、戦前、戦後の研究史を貫く最大の特色は、外交史的観点（とりわけ条約改正問題）であった。戦前にも1930年代には経済史的観点や使節団そのものの概括的な研究も出はじめているが、主要な関心事は外交的な側面にあり、この特色は戦後の第1期にも持続される。

外交史的研究と並んで、現在にも至るような新しい研究動向が現われてくるのは戦後の第2期であって、田中氏はそれを「思想史ないし比較文化史的研究」と呼び、加藤周一の「日本人の世界像」（初出は1961年、『近代日本思想史講座－8』筑摩書房）と芳賀徹の「明治初期一知識人の西洋体験」（島田謹二教授還暦記念論文集『比較文学比較文化』弘文堂、1961年）という二つの論文に代表させている。このよく知られた二つの論文についてここであらためてくわしく述べる必要はないであろうが、両者の対照的な特色をとりあげれば、加藤論文が、岩倉使節団と『実記』を重ねて見ており（じっさい加藤氏は『実記』が岩倉の著作であるかのような書き方をしている）、『実記』の分析から岩倉使節団ないしは明治維新のリーダーたちの対外観をみようとしている（本書 p. 6）のに対して、芳賀論文は『実記』は「形式的には官製品である。しかし実質は完全に久米邦武個人であった」（上記芳賀論文 p. 352）として明治初期一知識人の個性的な西洋体験をそこに読みとろうとしていることであろう。「総論」は、それ以後の『実記』解説にはこの二つの基本的な姿勢がつねにからんでくることを認めた上で、「この拙論は、加藤氏の立場をとっている」と自分の立場を明確に示しており、これが本書の際立った一つの特色となっている。（ただし後にも述べるように田中氏は加藤論文のその他のいくつかの記述には必ずしも成賛していない）。

第3期、すなわち1976年から現在に至る研究史の特色は次のように要約されている。「この期は第2期の研究を受けて、第2期にみられた外交史的研究や思想史、比較文化的研究もさらに進むが、最大の特徴は、本格的な歴史的研究が急速に幅広く展開したことにある。」（p. 8）その画期となったのは『実記』全五冊の覆刻（宗高書房）の出版（1975年）と岩波文庫版の刊行（1977～82年）、およびそれに付された解説であった。宗高書房版の解説は、後に大久保利謙編『岩倉使節の研究』（1976年）として出版され、また田中彰氏は岩波文庫の各編のくわしい注や解説の他に『岩倉使節団』（講談社現代新書、1972年）、『「脱亜」の明治維新』（NHK ブックス、1984年）などを出版、さらには1990年1月から始った芳賀徹氏によるNHK 市民大学「岩倉使節団の西洋見聞～『米欧回覧実記』を読む」などもあって、『実記』にたいする関心は一気にひろがった。田中氏はこの時期、すなわち現在の「本格的な歴史研究」にみ

られる特色を次のように列挙している。

- (1)岩倉使節団ないし『実記』を対象とした本格的な歴史研究が出てきたこと。それも使節団が訪ねた諸国のうち大国だけでなく小国や帰途に立寄った東南アジアに対する関心、あるいは外交史だけでなく、政治、社会、経済、産業、教育、宗教、文化、思想、等々のさまざまな領域からのアプローチが行われはじめている。
- (2)岩倉使節団にかんする個別研究の論文が発表されはじめ、使節団の組織や歴訪各国別の検討も開始された。
- (3)当時の新聞など現地資料の発掘と現地の研究の進展。
- (4)研究の学際化、国際化。例えば1989年9月18～23日のシェフィールドにおける「国際岩倉使節研究学会」など。
- (5)『実記』の基礎資料の整備と研究、および編者久米邦武にかんする研究の進展。これには久米美術館における資料の整理や展示、あるいは『久米邦武歴史著作集』全5巻および別巻として出された大久保利謙編『久米邦武の研究』の果たした役割が大きい。

今回出版された田中彰、高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』は、このような研究の現状のなかで行われ、その状況を見事に映しだした論文集であった。なおこの「研究史概観」は、巻末の「関係文献」を参照することによっていっそう説得的になることをつけ加えておこう。

3. 米欧回覧の諸特徴——その1

「総論」の第2章「岩倉使節団と『米欧回覧実記』」の第一節においては、久米の筆になる「環瀛筆記」などによって使節団のメンバー（46名と留学生42名）が特定され、また使節団の構成が倒幕を推進した国際体験の少ない薩長勢力と国際体験の豊かな旧幕臣との混合集団であってそこに「維新変革の“連続と非連続”とが凝縮されたかたちで反映」されていたことが指摘されている。

第2章の主要な部分を占めているのは、第2節、第3節の「米欧回覧」の諸特徴にかんする二つの部分と「アジア・東南アジア観」と題された第4節である。このように岩倉使節団の見たものが重視されるのは、この使節団の最大の目的が、結局は近代国家の制度・文物の調査・研究であって、条約改正の予備交渉や条約締盟国に対する儀礼的な訪問（国書の捧呈）は二次的なものであった、という判断にもとづいている。

では使節団はこの1年10カ月ほどの間に、各国で何を見、いかなる洞察をしたの

か。それに答えるのが本書の第2編、第3編に収められた諸論文であるが、「総論」ではその全体的要約的な回答が試みられている。まず第2節「『米欧回覧』の諸特徴ーその1」では、訪問諸国のうちの大国である、アメリカ、イギリス、フランスの三国における観察の特徴が記されている。アメリカでは、最初の訪問国であっただけに、使節団の印象も強烈で、自然や風俗にかんする記述も生彩に富んでいるが、とりわけ使節団が目しているのは、この広大な地域における短期間の建国を可能にした、自主自治の精神とプロテスタンティズム、実学的な教育、共和制と議会制度のありようなどであった。ここで田中氏が、使節団のあいだに「白人と黒人という肌の色による人種差別観はみられない」(p. 17)ことを指摘しているのは「在野の人物輩出とマス・コミの発達および文明との関係にも目を向けている」という指摘と共に、注目すべきであろう。

イギリスはどうであろうか。交渉相手のアメリカ政府に外交文書の不備をつかれ、あわてて天皇の委任状を本国までとりに帰る不手際があったりしてアメリカ滞在が延び、イギリスには夏のバカンスに到着するという事態が、使節団のイギリス滞在の趣きをいくらか変えて、ハイランド紀行のような美的な文章がイギリス篇にまぎれこんでいる。しかしながら使節団の関心の中心は、鉄と石炭の産出国イギリスにおける産業革命の現状にむけられていた。「この第二編は19世紀70年代のイギリス産業史ないし技術史であり、おそらく日本人の目で見え書かれた最初のイギリス産業革命史だといつてよいだろう」(p. 19)と田中氏は記している。政治にかんしても、アメリカと異なり立君政治のもとにおける議会のあり方が、天皇制が念頭にある使節団にとって、特別の関心事であったことは容易に想像できよう。だが田中氏は使節団がさらに立入って、イギリスにおける政治の地域差を鋭く観察していることに注意をうながしている。すなわち、ウエストミンスター諸区における国君の権威、ロンドンシティにおける共和政治、さらには地方における貴顕政治などの、一国における共存である。田中氏によれば、そこには福沢諭吉の『西洋事情』における英国考察よりも一歩突っこんだ深い観察が認められる。その他、大英博物館にかんする使節団の考察などが指摘されているが、ここでイギリスにかんする使節団の結論として引用されているのは次の一節である。

「此の国ノ幅員、人口、位地ノ、我日本ニ似タルトテ、其営生図利ノ目的ヲ学ハント欲スルモ、未タ得ヘカラス、故に英国ニ觀察シテ、感触ヲ我ニ与フル所、亦甚タ親切ナラス、只倫敦は世界天産物ノ大市場ナルヲ似テ、農利天産ニ富ム国

ニ於テハ、其貿易ノ景況ニ探ク注意スヘキハ、方今緊要ノ一ナルヘシ、内部ノ政治、国民ノ景況ニ於テハ、未タ我ニ緊要ナル所ヲミス」(Ⅱ-384~385)。

アメリカやイギリスにかんする記述については、第1編と第2編に参照すべき論考(第1編の第1, 第2, 第3, 第10論文や第2編の第12, 第13, 第14論文など)があるが、フランスにかんしては本書中には参照すべき論文がなく、それだけにいっそう田中彰氏の個人的な意見が直接に出されていると考えてよいであろう。ここでフランスにかんして特に注目されているのは次の4点である。

- (1)文明の中枢としてのパリ。
- (2)ニューヨーク、ロンドンと並ぶ世界三大貿易の都府(世界工産物の市場)。
- (3)政治の流動性と階級矛盾。
- (4)労働権利説とナポレオン三世の社会政策。

最後の二点については説明が必要だろう。(3)にかんしては「もうひとつ、フランスで岩倉使節団が痛感したのは、この国の政治の流動性・激動性とを文明国の階級矛盾の認識であった」(p. 23)と書かれている。ここで問題になっているのはパリ・コミューンと大統領アドルフ・ティエールにかんする叙述である。『実記』は当時パリにいた西園寺公望などと同じく、パリ・コミューンを「暴徒」や「賊徒」と呼び、反感をあらわにして、次のような文章を記している。

「文明ノ国モ、中等以下ノ人民ニ至リテハ、猶冥頑ニシテ驚悍ナルヲ免カレス、西洋各国、上下ニ通シ風俗美ナリト謂ハ、亦大ナル誤リナリ」(Ⅲ-141)

田中氏は上の文章を引用して、次のような結論に導いている。「それは現地を踏むことによって初めて認識しえたヨーロッパ近代国家の階級矛盾であり、はるかアジアの地から日本が抱き続けていた近代ヨーロッパ国家幻想からの覚醒であった。と同時に、そこにはこの使節団の階級的視座が明確に浮き彫りにされているともいえよう。」(p. 23) これは田中氏の『実記』解釈の一つの支柱をなる重要な一節であるが、はたしてそう言い切れるのか。パリ・コミューンに対する反応をただちに使節団(あるいは久米邦武)の階級意識に結びつけてよいのだろうか。また、もし「近代ヨーロッパ国家幻想」からの覚醒であれば、どうしてナポレオンの社会政策(「職工市街の法」や「勸奨恵恤ノ方法」など)を称賛する必要があったのだろうか、といった疑問が残る。この点にかんしては第二部で改めて問題にしたい。

4. 米欧回覧の諸特徴—その2

「米欧回覧」の諸特徴—その2では、小国と後進国にかんする記述の分析が行われている。ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、スイスなどにかんしては、小国の独立と中立がいかにして維持されているか、という観点から、人民の勤儉や質実剛健の気風を育てる風俗や教育が注目されている。ウイン万博が「大平の戦争」として認識され、小国の自負という観点から「国民自主の生理」の結集として描かれているという指摘も興味深い。これに対して、イタリアのような「ヨーロッパ文明の淵源」である国においては文明の豪奢とともに衰退が印象づけられる。そのなかで使節団には、ゲーテが愛した「イタリア的怠惰」を評価する余裕がなかったことも指摘されている。オーストリア＝ハンガリー帝国におけるオーストリアとハンガリーの異質性を使節団が見抜いていたという指摘も重要であろう。

使節団は小国日本の自覚と自負を投影してヨーロッパの小国を見ている。では後進大国とも言うべきドイツやロシアの場合はどうであろうか。

ロシアにかんする記述については第1編の5に外川継男氏のゆきとどいた分析があり、「総論」ではそれをふまえて、次の三点が要約的に指摘されている。

- (1)ロシアが貴族専制の帝政国家であること。
- (2)ギリシア正教と国民との関係が注目されていること。
- (3)日本との関係においてロシアの過大評価をいましめていること。

ところで外川論文は、このロシアにかんする五巻は「粗雑な誤りが多い」ことをくわしく指摘している。岩倉をはじめ政府の中枢にはロシアに特別の関心をもっていた者がいたにもかかわらず、この部分がそれほどずさんであり、また久米自身のロシア蔑視が強く表われているとすれば、田中氏が本書で強調している『米欧回覧実記』の公式報告の性格に疑いを抱かせはしないであろうか。少なくとも外川論文を読むかぎり、そのような疑問を禁じえない。

『実記』を使節団の帰国後の明治政府の政策と関連づけて読もうとする場合、プロイセンにかんする記述が特別の重要性をおびてくる。プロイセンは使節団にとって「特別の国」であったのだろうか。田中氏はプロイセンを「特別の国」とする先述の加藤周一論文を引用した上で、そのことを次のように否定している。

「だが、それは使節団が当初からプロシアを「特別の国」とし、ここをめざしていた、というふうに解してしまうと、それは1880年代の日本の動向からの過大な推測になるだろう。私は岩倉使節団が近代天皇制国家の創出という大きな枠組のなかでは、少なくとも日本のモデルの選択肢をまさぐっていたのであり、この時点ではプロシア

に相対的な比重をかけつつも、それはなおひとつの選択肢以上のものではなかったと思う。」(p. 28)

私はこの判断は正しいと思う。じっさい田中氏がそれに続いて指摘しているように、『実記』におけるプロイセンの現状（とりわけ習俗）にかんする批判はきわめて厳しいものであるのだから。しかしながら、新興都市ベルリンにおける人間の欲望への言及から、第三の特徴としてただちに「ブルジョア的自由とその上からの規制の問題」を読みとるのは、いささか性急にすぎはしないだろうか。「ブルジョアの人間像と資本主義的都市との関連」(p. 29)の問題であれば、ロンドンやパリの方がよく見分けられたであろうし、次に指摘されているビスマルクのレアル・ポリティークや民族統合の問題は、ブルジョア的自由とは別の観点から（例えば後進国における国家理性や国家の論理から）考察した方が私にはわかりやすい。もっともこのような疑問が生じるのは、おそらく田中氏の言う「ブルジョア的自由」が何を意味しているのか、私にはよくわかっていないからであろう。

5. 東南アジアの問題

本書の特色の一つは、『実記』のアジア・東南アジア観に特別の注意がむけられていることである。前記の加藤論文は、岩倉使節団がアジアを見ようとしなかったという前提の下に、「岩倉は彼ら〔インド人やマレー人やシナ人〕に言及していない」とし、「植民地化または半植民地化された諸国の内側には全く関心がなかったのだ」と断定しているが、田中氏は加藤論文のこの部分を引用した上で、次のように記している。

「これは重要な指摘であるが、いささか不正確といわざるをえない。使節団が「半植民地化された諸国の内側に全く関心がなかった」のはこの使節団の目的とからむだろう。たとえば、イギリスやオランダの貿易や財政について述べる場合にも、ほとんどアジアその他の植民地との関係は無視に近いかたちで記述されている。

だが、帰航路における『実記』の叙述は、その欠落させた視点にもかかわらず、アジア・アフリカについて、他の類書とは比較にならないほど詳しい。」(p. 39)

私はこの田中氏の指摘は正しいし、特に後半分部の指摘は重要だと思う。『米欧回覧実記』が岩倉使節団の公式報告書であれば、訪問12カ国にかんする記述だけで十分であって、もともとアジア・東南アジアについての記述は無くても当然なのである。したがってこの書物にアジアが欠けていると批判するのは、ないものねだりということになるだろう。しかしじっさいには、『実記』には、第94巻から第100巻に至る7巻の「帰航日程」がつけ加えられており、パナマ運河やセイロン島、あるいはカルカッ

タ、シンガポール、香港や上海、等々にかんして、かなりくわしい記述が行われている。田中氏の言葉をかりれば「他の類書とは比較にならないほど詳しい」のである。

ところで田中氏は『実記』における「看過しえない重い指摘」として、次の4点をとりあげている。

(1)スエズ運河の重要性を十分に認識したくわしい記述。

(2)東南アジアを中心とした自然観と文明観。くりかえされる「極楽界」という言葉。だがこの言葉はその裏に西欧文明信仰をひめているというのが田中氏の主張である。—「この「沃土ノ民ハ惰ナリ」を裏返した「勤勉ノ苦」こそが「文明」を生み、「生理ニ勤勉スル力」こそが「国ノ貧富」を規定するという文明信仰が、米欧を近代先進国とみる基準であり、それは同時にアジア、とりわけ東南アジアをみる彼らの指標でもあったのである。」(pp. 40~41)

(3)「東南洋」は利を「博取」される植民地であり、そこで利を得ようとする者は「文明国」よりの棄民である、という認識。—田中氏はそこにも使節団の「ヨーロッパ文明信仰」を認め、さらにアチェ戦争にかんする記述のなかに「オランダの植民地政策を肯定する口吻」(p. 41)を読みとっている。私はここで引用されている部分を読むかぎりでは、むしろオランダ批判に思えるのであるが、この点も次章で改めて論じたい。

(4)「脱亜入欧」の発想。—『実記』の「帰航日程」の諸編に限らず、田中氏の『実記』全体の解釈には一貫して「脱亜入欧」というテーマがあると思う。それは岩倉使節団の目的からみて、ごく当然なことであるが、ここで不思議に思うのは、そのある意味では当然なことの論証の仕方にかかなり無理が感じられるということである。例えば、「それはまさに「脱亜入欧」の発想にほかならない」として氏が引用している文章は、私には全くそのようには読みとれない。これは『米欧回覧実記』の読み方の根本にふれる問題だと思われるので、次章ではもう少し厳密に考えてみたい。

6. 『米欧回覧実記』の文書としての性格をめぐる

「総論」の第三章「『米欧回覧実記』をめぐる」においては、使節団ではなく著作としての『実記』の性格の解釈にかんして重要な提案がなされている。その第一は、「公式報告書としての『米欧回覧実記』」という性格づけである。このことはすでに、研究史の概観の部分で強調されていたが、この章ではあらためて、フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」と「一人米人フルベッキより内々差出候書」の内容と『実記』の構成や書き方との類似から論証されている。「フルベッキのこの懇切丁寧な手引き的意見書があったればこそ、岩倉使節団の『実記』というみごとな公式報告書はでき

あがったのである。」(p. 44) この指摘は正しいと思う。だが疑問が残らないわけではない。例えば、第一編のアメリカの部は、なるほどフルベッキの13項目にわたる具体的な教示にきわめて近い構成をとっているかもしれない。だがイギリス、フランス、プロイセン、等々にかんしても同じことが云えるだろうか。『実記』の記述のスタイルは、田中氏も指摘しているように、国によってかなり異なったスタイルをとり、注目する項目も異なっている。それに、フルベッキの49項目は、はたして使節団にとって必要な事項のすべてを満たしているだろうか。また久米はじっさいにその49項目に目を通し、手元に置いて『実記』を書いたのだろうか。

第二の「一種のエンサイクロペディア」としての『米欧回覧実記』という性格もまた、フルベッキの教示、とわりけ回覧中の着目点として示された、49項目に端を発していることが指摘されている。田中氏はさらにイギリスのエフレイム＝チェンバースの『学術百科事典』やフランスの『百科全書』、あるいは明治政府が翻訳出版を推進した『百科全書』などの例をあげて、エンサイクロペディアそのものの持つ歴史的意味や『実記』とのちがいを示した上で、次のような提案を記している。

「しかし、この『実記』を、大隅氏の著書にあるような「百科事典的な書物」の流れにおいてみるならば、明治維新という封建から近代への一大転換期における社会・文化の反映（とくに日本の場合、外国の制度・文物の移入・移植の側面が大きな比重を占める）としての一産物としてみることができよう。

いや、そうしたエンサイクロペディアの視角からこの『実記』をみ、これを位置づけることは、明治維新という変革が何であったかを新しい視点から照射するひとつの方法となるにちがいない。」(p. 50)

『実記』は、米欧の制度や文物を全体的に理解しとり入れるという意図をもった使節団の報告書であってみれば、それがエンサイクロペディア的部分をもつことは容易に想像される。だがそれは米欧の制度や文物にかんしてのエンサイクロペディアであって、それとはまた別の、あるいはそうした観察を可能にした、江戸期からの日本における独自の「一種のエンサイクロペディア」の存在もまた注目にあたいするだろう。いすれにせよこれは興味深い指摘であり、この方向でのいっそうの研究と議論の進展が期待される。このような角度から解釈しなおされた明治維新の変革の性格について、田中氏がどのような見解をもっておられるのか、これも知りたいところである。

7. 東西文明比較論

『実記』の「一種のエンサイクロペディア」としての側面は、『実記』の「実録」

としての側面であり主として「日記」の部分に記されている。これに対して「洞察」の書としての側面は、主として「論説」の部分に記されている。またその「洞察」の基本的な視角は、田中氏によれば「東西文明比較論」である。田中氏は特に次の6点をあげている。

(1)「東西両洋を比較するひとつの要素」としての人種論。「白種ハ……慾深キ人種ナリ、黄種ハ……慾少キ人種ナリ」(V-149)。「実記」はこの前提から西洋における「保護の政治」と東洋における「道德の政治」という結論を導きだしてくるが、「人種論で東西すべてをたち割っているのではない」ということを田中氏は強調している。この「ひとつの要素」という指摘は重要だと思う。

(2)風土論。このような人種のちがいも風土によって説明され、土地が肥沃なアジアでは人々は一般的に怠惰であって文明は育たず(その極端な例が「東南洋」)、土地の痩せたヨーロッパにおける人々の勤勉が文明を生みだした、という文明観が『実記』全体をつらぬいている。

(3)道德、すなわち何を「廉恥」とするかとのちがい。ヨーロッパでは自主や権利の主張が当然とされ、それをしないことが恥とされるのに、アジアではそうでない。そのことが政治や産業の形態にかかわってくる。

(4)社会構造の相違。ヨーロッパ社会の「会社」(ゲゼルシャフト)的性格に対する、アジアの共同体の社会(ゲマインシャフト)的性格。したがって政治形態や富に対する認識も異なってくる。

(5)合理的あるいは体系的発想の有無。ヨーロッパにおいては、合理的体系的な発想があるが、アジアにはそれが乏しい。(その典型例が中野論文で指摘されているような、東西の動物園や植物園のちがい)。アジアの「プラチカル」に対してヨーロッパの「タオリック」。

田中氏はさらに、こうした東西比較論を福沢の文明論と比較して、『実記』は「官」の立場での文明論であることを指摘している。だが残念なことに、「官」と「民」の文明論のちがいはどこにあるのかについての説明はない。また『実記』におけるこのような分析はきわめて冷静であり、この5項目のすべてについて、東洋よりも西洋の方がよいと判断しているわけではないと思われるが、それでも東南アジアの節で問題になった、「西洋文明信仰」ということが言えるのであろうか、といった疑問がのこる。

「総論」第3章第4節のタイトルは「『米欧回覧実記』の編修者、そして歴史家としての久米邦武」となっている。ここでは主として自筆の「履歴書」を追いつながり久

米の生涯と歴史家としての業績や特色がたどられている。われわれ読者が久米邦武という人物を知るにはたいへんありがたい10ページほどの文章であるが、久米の人物論としても、またその歴史家としての位置づけにかんしても少しもの足りない気がする。『米欧回覧実記』の政府の公的文書としての性格を強調してきた以上、本書で久米という人物の影がやや薄くなってしまうのはやむをえないであろう。また手書きの「履歴書」を使うのは巧みなやり方だと思うが、それに記されたことがどの程度の真実性をもっているのかについては、もう少し厳密に検討すべきではないだろうか。「自伝」や「履歴書」は、案外に思い違いや脱落が多いものなのだから。

以上「総論」を中心にした要約的な紹介と批評を終り、次の第Ⅱ部では本書で提起された重要な問題にかんして、私自身の解釈と意見を述べさせていただきたい。

Ⅱ 提起された諸問題について

1. 『米欧回覧実記』の文書としての性格をめぐって—公式報告書か？

田中彰氏の「総論」では、『実記』の公式報告書としての性格があらためて強調されている。『実記』の表には久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」と記され、また、「太政官記録掛刊行」と明記されていることから、それが形式的に公式報告書であることは疑う余地はない。それににもかかわらず、田中氏が改めて公式文書であることを強調するのは、一つには芳賀徹氏をはじめとして、『実記』を一つの文学的な作品として読もうとするグループの出現があったことによると思われる。

じっさい田中氏は「研究史概観」のなかで、第二期（1961—75年）の特色は「思想史ないし比較文化的研究」の登場であるとして、それを代表する論文として加藤周一「日本人の世界像」（1961年）と芳賀徹「明治期一知識人の西洋体験」（1961年）をあげ、田中氏自身は「この拙論は、加藤氏の立場をとっている」（p. 7）と明言している。加藤氏の立場をとるということは、「久米邦武個人の文学的感性に収斂させて『実記』をみようとする方法論」に対して、「政治史とからみ合う思想史の立場から岩倉使節団への広がりをもつ」方法論を選ぶことを意味している。そしてこの後者の立場から『実記』が岩倉使節団の公式報告者であることが強調されるのは当然であろう。上記、加藤周一論文はその点かなり極端であり、久米邦武という編修・執筆者をほぼ完全に無視して「岩倉がここで指摘した問題……」「岩倉の立場は……」「岩倉は彼らに言及していない……」「岩倉はその理由を問わなかった……」等々、これがあたかも岩倉によって書かれた文書であるかのような論じ方をしている。

田中氏が『実記』の公式報告書としての性格を強調するもう一つの観点は、その編

集プランと成稿過程である。ここで重要なのは主として次の4点であろう。

- (1)フルベッキ文書の存在。使節団派遣立案の発端で大きな役割をはたした「フリーフ・スケッチ」と使節団の出発の直前に提出したとされている「米人フルベッキより内々差出候書」。とりわけ後者には「大使一行ノ回歴シタル顛末ヲ著述スル法」にかんするくわしい説明があり、『米欧回覧実記』の執筆編纂はそれに従って行われたと考えられる。
- (2)『実記』の「例言」に岩倉大使が畠山義成と久米邦武に記録係を命じたことが記されており、また自筆の「履歴書」のなかにも「5年〔1872年〕8月3日英国倫敦府ニ於テ使節紀行纂輯専務ニ心得、杉浦弘藏（後ニ畠山義成）申談シ、取調ヘヲ命セラレ、6月9日大使ト共ニ帰朝復命ス」とある。
- (3)帰国後の職務と残された草稿や資料から推定される成稿過程。
- (4)『実記』を太政官に提出し編修の賞として金5百円を下賜された。

こうして『実記』の公式報告書としての性格は一見、自明なことであるかのように見える。だが疑問が残らないだろうか。私には以上の4点が逆に、『実記』の公式報告書としての性格にさまざまな疑いを抱かせる論点を含んでいるように思われる。

まず第一に、「フルベッキより内々差出候書」の件であるが、これは政府と岩倉使節団のなかでどのような取扱いをうけたのであろうか。この意見書は誰に渡され、誰が読んだのか、そして彼らはそれをどのように評価したのか、とりわけ編者の久米はどうだったのか。少なくとも以上の諸点が明らかにされなければ、フルベッキの教示に従って『実記』が書かれたというのは、単なる推測にすぎないだろう。仮にフルベッキの意見書が大きな役割をはたしたとしても（それは大いに考えられることであるが）、使節団はそれをそのまま鵜呑みにしたのであろうか。

田中氏は以上の問題に触れることなく、むしろ『実記』の記述内容から、それがフルベッキの指示に従ったものであることを証明しようとしているような印象をうける。たしかに田中氏が指摘しているように、「例言」や第一編のアメリカにかんしてはかなりの程度一致が認められるとしても、その他の諸国にかんして、同じような主張をすることはできないだろう。それにフルベッキによって示された着目点の49項目は、実によくできていると感心せざるをえないが、それでも完全無欠というわけにはいかない。例えば、人種民族問題や貿易など、『実記』ではじっさいに重視されている項目がこの49項目には欠けている。この着目点はどうやら国内の諸問題はよく見えているが、国際的な関係については弱いようである。したがって米欧を回覧して世界的な視野で現実を眺めることができるようになった『実記』の記述は、次第にフルベッ

キの枠組を離れるようになる。例えばヨーロッパにかんする「総論」や「帰航日程」など。このことは逆に言うと、フルベッキの提言を重視して、その観点からのみ『実記』を読むと、彼らが見た重要なものの幾つかを見落すことになるし、彼らが獲得した世界像をゆがめてしまうことになりかねない。

第2点の「例言」における説明は、読み方によってはむしろ『実記』の公式報告書としての性格にかんする考え方に修正をうながすような性質のものであろう。まず『米欧回覧実記』という表題について「例言」では次のように説明されている。「本編ハ大使公務の余、及ヒ各地回歴ノ途上ニ於テ総テ覧観セル実況ヲ筆記ス、是ヲ以テ回覧実記ト名ク、故ニ使節ノ本領タル、交際ノ応酬、政治ノ廉訪ハ、反テ之ヲ略ス、別ニ詳細ノ書アレハナリ」。つまり、使節の本務にかんしては各省理事官の報告書その他、別に詳細なものが出るから、本書はむしろ大使公務以外のことで、各地をまわって見聞してきたものを記す、と言っているのである。また、畠山、久米の二人が岩倉大使に記録編集を命じられたというくだりも、使節団が各国で歓迎された有様を記すというのが主旨であって、使節団の本務からはずれた「回覧覧観セル所ヲ、審問筆録」することが任務とされており、『実記』が限定付の公務報告書であることが強調されている。また上に引用した自筆履歴書における、明治5年8月3日、つまり出発から9カ月以上もたって滞在地のロンドンでこの係に任命されたというのは、いささか奇妙な記述ではないだろうか。もしそれが事実としたら（これにかんする公式文書はまだ見つかっていない）、『米欧回覧実記』といった性質の文書は当初は予定れておらず、米欧滞滞の途中で思いつかれたか、あるいは岩倉の個人的な依頼ということになるのではなかろうか。

第三点。田中氏によれば、「帰国後の邦武は『実記』の編修と執筆に専念した」（p. 57）ということである。これも一見、全く自明のこのように見える。編修と執筆に専念しなければ、あれだけの大著を、短期間に、しかも独力で完成させることは不可能であろう。だが、明治6年（1873年）大使とともに帰朝した邦武は、ただちに公式のポストを得て編修執筆に専念できたのではなさそうである。自筆履歴書には、編修執筆にかんする記述がない。「6年9月大使ト共ニ帰朝復命ス。7年記録課長トナリ、法例彙纂編輯ヲ擔当ス。……」とただちに別の職務についたことが記されており、かんじんの大使事務局のことは触れられず、かなり唐突に「11年12月29日米欧回覧実記編修成功ニ付、其賞トシテ金五百圓下賜セラル」という記述がくる。田中氏の「総論」をはじめ岩波文庫の解説や「久米邦武と『米欧回覧実記』の成稿過程」(1)を読んでも、久米が公式にいつどのポストでどのようにして編纂の仕事にたずさ

わっていたのかを正確にたどることができないのである。また使節団が収集した文書や報告書等が、明治6年(1873年)5月5日の出火で類焼したことは別にしても、本務の公式報告書であり『実記』の基礎資料となるべき各省の理事功程も予定されたすべてが出揃っていたわけでもない。つまり田中氏が『実記』の公文書的性格を強調する資料と論述を読めば読むほど、『実記』の編纂が政府の制度や組織のなかに公式に位置づけられていないことが強く印象づけられてしまう。むしろ久米は自分に与えられた本務とは少しずれたところで独力でこの仕事を続けていて(じっさい田中氏が確認されているように、草稿は久米ひとりの筆になる)、それが完成したことによって公的報告書としての形式を与えられたのではないだろうか(2)。そしてここであらためて、岩倉と久米の関係がどのようなものであったかが問題になるだろう。

最後に太政官から下賜された500円という金額は、『実記』の編修の公的な性格よりはむしろ半ば私的な性格を物語ってはいないだろうか。全く公的な仕事であれば、印税に見合うそのような大金が一個人に与えられるのは奇異な感じを抱かせる。いずれにせよ久米は、それに直接かかわる上司や同僚もなく(帰国後直ちに開成学校長兼外国語学校長となった畠山は、帰国後この仕事にはほとんどかかわっていない)、上部からの編纂にかんする指図もないままに、自己の使命感の他はこれといって制約のない、公務としては考える限り自由な立場で『実記』の編纂・執筆、そして公刊にあたることができたと考えられる。

もし『実記』がそのような性質の文書であれば、公式報告書としての性格を強調して、この文書からすぐさま明治政府の意図や使節団の階級意識を引きだすことは正しくないだろう。使節団は田中氏も指摘しているように「倒幕を推進した薩長勢力とこれに敵対した旧幕臣との呉越同舟であり、国際体験のない人びとと国際体験をもった人々との混合集団」(p. 13)であった。また大使の岩倉と副使たちとの間にもさまざまな意見や気質のちがいがあり、同じ一人の人物をとってみても、この変動期には変化が激しい。そのような集団から単一のイデオロギーや階級意識を引き出すことはもともと不可能であり、ましてやそれを久米に代表させることはできない。『米欧回覧実記』は、まず久米邦武の文章として読まれるべきであり、そこから筆者とは別の特定の個人(例えば岩倉)や集団の意識やイデオロギーをとりだすためには、それにふさわしい手続きをふむ必要があるだろう。誤解のないようにつけ加えれば、私は決して「久米邦武個人の文学的感性に収斂させて」(p. 7)『実記』を読むことを提案しているのではない。だがテキストはテキストとして厳密正確に読まなければならないと思う。

2. フランスとドイツの回覧—国家幻想からの覚醒か？

アメリカとイギリスの長期滞在をおえてフランスに入った使節団には、ある種の感動と同時にとまどいがあったことが、『実記』の叙述から読みとれる。フランスはアメリカやイギリスほど日本には知られていなかったこともあるが、アングロサクソンの政治や習俗のあり方とラテン系の世界とのちがいが、肌身で感じとられたにちがいない。使節団はイギリス滞在のあいだに、フランス、とりわけパリという世界の都に対するある種の幻想を抱かされていた。それはパリの「ディスト」駅に着き、月下の市中を馬車で走る際の心のたかまりを伝える文章(Ⅲ-40)にすでにうかがわれる。次の文章もその一例であろう。

「欧州各邦、及ヒ欧州人種ノ住スル国々ハ、ミナ此都ヲ文明都雅ノ尖点トナシ、遠近ニ尊敬セラレ、英人ノ高慢ナルモ、婦人ノ風俗ハ、巴黎ノ新様ヲ模倣シ、露国ノ強大ナルモ、仏人ヲミレハ都人士トナシ、巴黎ノ麗都ハ、天宮月榊ノ想ヒヲナス、抑、仏国ノ欧州ニ尊敬セラレ、巴黎ハ文明ノ中枢トナリ、流行ノ利権ヲトルハ、其由来久シキコトニテ、……」(Ⅲ-55)

パリはアウラをもって見られており、またアウラを生みだす都市として見られている。ニューヨーク、ロンドンと並んで三大貿易都府の一つとされる場合でも、パリは欧州工芸の中心であって「世界工産物ノ市場ト名クヘシ」とされているのである。これは他の都市とは根本的に異なる性格であろう。

だがこの都市にはそうした都雅の風とは全く対照的に、他面では政治闘争と革命の舞台であった。『実記』はパリ・コミューンを、当時パリに居た西園寺公望などと同様、「暴徒」や「賊徒」呼ばわりにして、無知をさらしている。このような「文明の中枢」と「暴徒」を結びつける論理を久米はどこに求めたのか。「文明ノ国モ、中等以下ノ人民ニ至リテハ、猶冥頑ニシテ驚愕ナルヲ免カレス、西洋各国、上下に通シ風俗美ナリト謂ハ、亦大ナル誤リナリ」(Ⅲ-141)つまり久米は、コミューンの乱を人民の文明化の遅れによって説明しようとしたと考えてよいだろう。これにかんする田中彰氏の解釈は次の通りである。

「それは現地を踏むことによってはじめて認識しえたヨーロッパ近代国家の階級矛盾の現実であり、はるかアジアの地から日本が抱き続けてきた近代ヨーロッパ国家幻想からの覚醒であった。

と同時に、そこにはこの使節団の階級的視座が明確に浮き彫りにされているともい

えよう。」(『学際的研究』, p. 23)

田中氏の他の著作からも推測されるように、ここではエンゲルスの「フランスは、歴史上の階級闘争がつねにほかのどの国よりも徹底的に、決着までたたかいぬかれた国であり……」という、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』第三版の「序文」の文章(3)と、マルクスのフランス三部作、とりわけ『フランスにおける内乱』が想起されている。だが、マルクス、エンゲルスの説の当否は別として、使節団がパリ・コミューンの生々しい跡を見て、「近代ヨーロッパ国家幻想」から覚醒したというのは正しいだろうか。田中氏が上に引用した『実記』の叙述から、この結論を導きだすのなら、私はまず「国家幻想」という用語が不正確だと思う。『実記』に記されているのは、「中等以下ノ人民」が文明化されていないという現実の発見ではあっても、それがそのまま「近代ヨーロッパ国家」に対する不信にはつながらない。近代ヨーロッパにはさまざまなタイプの国家があることを使節団はある程度知っていた。またその滅幻は国家に対してなのか国民に対してなのか？あるいは文明に対してなのか、それも区別して考えなければならないだろう。

じっさい、田中氏自身が上記の文章にひき続いて指摘しているように、『実記』はルイ・ブラン他の「労働権利ノ説」を激しく批判する一方で、コミューンの弾圧者ティエール大統領に最大の賛辞を送り、しかもティエールとは敵対関係にあったナポレオン三世の社会政策(「貧民救助ノ法」「職工市街ノ法」,「勸奨恵恤ノ方法」)さらには「下水隧道」や「ビットショーモン」の大土木工事、等々)を称賛している。「拿破侖第三世在位ノトキ、巴黎ノ生産ヲ導キ、工芸ノ業ヲ盛ンニシテ、其利潤ニヨリ、金八十万ノ政ヲナス、中等以下ノ民ニハ、深ク利益ヲハカリ、「ハイマーケット」「モンティエター」等ノ設ケ、ミナ賤民貧家ノ利ヲウクルモノ少カサレハ、其徳ヲ今ニ仰慕スルトナン」(Ⅲ-83)

マルクス主義の洗礼をうけていらい、わが国の歴史家たちが見ようとしなかった第二帝政の意味とフランス社会の現実を、久米邦武はきわめて正確に観察していると言ってよいだろう。だが、フランス編全巻を通して言われていることは、「近代ヨーロッパ国家」に対する幻滅どころではない。むしろ人民に幸福をもたらす国家に対する信頼である。『実記』は他の部分では普仏戦争の賠償金支払にかかわって次のように記している。「政府貧ナレドモ、民皆富ム、全国依然トシテ生理ヲ進ム、私人因テ謂フ、国ノ貧富ハ、政府ニ財ヲ蓄フノ豊歉ニアラス、人民ノ貧富ニテ定マル」(Ⅲ-34)

このような政治観、国家観が何にもとづいて表明されているかはおよその見当はつ

く。それは家父長制的恩情主義とでも言うべきものべあろう。つまり儒教的な「保護の政治」の観点からは、第二帝政の政治はきわめて理解しやすいものであった。そしてこのような政治観が一定の階級意識に結びついていることは十分想像できる。だがそれは「使節団の階級的視座が明確に浮き彫りにされている」ような性質のものであろうか。私はすでに第一章で、『実記』のテキストの性格からして、そこから直ちに使節団の階級意識を取りだすことはできないこと、またテキストの問題は別としても、使節団という雑多の構成要素をもつ集団から単一の階級意識を取りだすことは困難であろうということを指摘しておいた。ここではもう一つ、使節団のなかにマルクスの言うような階級観念がはたして形成されていたのかという疑問をつけ加えておきたい。『実記』を含めて、当時の日本人パリ滞在者のパリ・コミューンにかんする記述は、逆にそのような階級観念がいまだ未熟であったことを物語っているように、私には思える。

もうひとつ田中氏の解釈がテキストから離れてきわめて観念的になる場面を指摘しておきたい。それはパリとは多くの点で異質なヨーロッパの大都市ベルリンにかんしてである。『実記』はベルリンの二つの側面を見落していない。一つは普仏戦争の勝利に酔う兵隊や学生たちが跋扈し粗暴に振舞う、いまだ文明化されていない都市ベルリン。もう一つはすでに退廃の色濃いテカダンスの都市ベルリン。

「日耳曼ノ貴族、仏国ノ文物ニ心ヲ蕩^{うご}シ、奥国の貴族、金衣玉食ニ沈ム、ミナ独逸人ノ性格ヲ察スヘキモノナリ、況ヤ人ノ常情タル、一タヒ覺^おヘタル便利ハ、又棄^あルヲ得ス、一タヒ生^うシタル嗜好^おハ、又洗^あフヘカラス」(Ⅲ-310)

田中氏は上の文章を引いたあとで、そこに「人間の欲望とベルリンに代表される新興都市の問題、換言すれば、ブルジョア的自由とその上からの規制の問題」があるとし、さらに『実記』のベルリンにかんする記述は、「ブルジョア的人間像と資本主義的都市との関連を描いている」と指摘する。田中氏には別に「岩倉使節団とプロシアー『米欧回覧実記』にみる」(『現代思想』4巻4号、1976年)があり、プロイセンにかんする分析はフランスにかんする場合よりも精緻だと思う。だがなぜここに突如、「ブルジョア的自由」「ブルジョア的人間像」「資本主義的都市」といった、いささか古風でそれ自体内容の明確でない大概念がとびだして、精密な分析をだいなしにしてしまうのだろうか。

三つの特徴が指摘できると思う。ひとつは、分析や解釈がテキスト離れを起こすと

ころに、生硬で観念的な既成の用語が現われるということ。第二は、そのとき、古い歴史概念の断片が突如浮上し、特定の歴史観に合わせてテキストの性急で強引な切断や歪曲が行われるということ。第三に、そこには解釈者の良心とも言うべき倫理的道德的な要請が強く働いているということ。その最も際立った例が、「帰航日程」の記述から使節団の「文明信仰」と「脱亜入欧」の意図を読みとる場合であろう。次にこの問題を考えてみたい。

3. 極楽界と沃土の情俗——「文明信仰」か？

「帰航日程」には「極楽界」（あるいは「極楽土」）という言葉が三回くりかえされている。最初は、第97巻「錫蘭島の記」の冒頭、ゴール港湾風景の描写のなかで。久米的名文の一つと言ってよいこの1ページほどの記述は、次のような一節でしめくくられているのである。

「熱帯ノ国ハ、山緑リニ水青ク、植物ハ栄ヘ、土壤ハ映⁶にして、空気ノ清キ、景色ノ美ナル、欧州ヨリ来リテ、此景象ヲミレハ、真ニ人間ノ極楽界と覺フカ如シ」（V-283）

次に「極楽界」という言葉が出てくるのは、第98巻「榜葛刺海航程の記」における、カルカッタ府中の次のような記述のなかにおいてである。

「○城府ノ南方ニ、英人ノ移住セルモノ、及ヒ欧洲各国ノ人住居シ、屋廬^{おくろ}ノ造営モ、亦欧洲ノ風ヲ帯ヒテ壯麗ナリ、其北部ハ土人ノ居タリ、維廉城外ト市街トノ間ニ、空敞^{くうしやう}ナル地アリ、修メテ府中散策ノ場トナス、終日車跡人声タユルコトナシ、府中ノ造営ニ於テ、第一ニ高壯ナルハ、政事堂トス、次ニハ「ガハナル」館タリ、此官ニ命セラレタルハ、英国ノ榮選ニシテ、此館ニ繫駐シ、英国王ニ代リテ、万機ヲ裁スルモノタリ、此外市庁、大裁判所、造幣寮等、ミナ政府ノ建築ニカゝル、其他屋造ノ美、街路ノ修^{おさ}レル、東方ヨリ、始メテ至ルモノハ、目ヲ刮^さラサルナシ、大抵欧洲風ノ建築ニテ錯^{さく}ユルニ、亜細亜風ヲ以テス、路ハ潤ニシテ坦平、且潔^{かつ}ナリ、处处ニ遊苑花園アリ、椰子、棕櫚^{しやうろ}樹、芭蕉ノ類ヨリ、スヘテ熱帯地方ノ花卉^{かき}ヲウエ、爛漫トシテ終年芳菲^{はうひ}シ、花媚^{なみ}ヒ葉秀テ、天宮極楽界ノ想ヒヲナス、」（V-298）

ここで注意しなければならないのは、アウア号はカルカッタに寄港せず、したがっ

てこのカルカッタにかんする記述は、じっさいの見聞ではなく、おそらく案内書のようなもの（特定できていない）からの引き写しであろう。その原本にはたして「天宮極楽界」というような言葉があったか否かも確認できないのであるが、「亜細亜風」という言葉が「天宮極楽界ノ想ヒ」を導いていることは容易に想像できる。熱帯地方すなわち極楽、というようなステレオタイプに近い発想が久米のうちにできあがっていたのかもしれない。なお久米が寄港地でないカルカッタに多くのページをさいた最大の理由は後に述べるように、貿易港としての重要性にあったと思われる。

第三は、「極楽界」ではなく「極楽土」である。これは第99巻「支那海航程ノ記」におけるシンガポール港の風景描写の結びとして出てくる。ゴール港の場合とほとんど同じ描写のパターンである。

「港ノ前ニハ、島嶼^{とうしよ}大小星羅シ、大ナルハ十数方英国、其他瑣小ノ嶼ヲツ、リ、平嶼アリ、凸嶼アリ、ミナ樹木蒼鬱ナリ、遠キハ眉黛^{びたい}ヲナシ、霞ヲ拖^ひキテ靄^{あいじよ}如ナリ、近キハ背梁^{せりやう}ヲ竦^{そびや}カシ、水ニ鑑ミテ蜿蜒^{えんげん}ス、一島ヲ送レハ、一島迎ヘ来リ、裏面ノ島嶼、漸クニ位置ヲ移シ、眺望奇絶ナリ、頗ル我中国海ノ景ニ似タリ、錫蘭^{セーロン}ヨリ以来、航路愈^{いよいよ}東スレハ、景色愈秀麗ナリ、地熱帯ニ際シテ四時草青ク樹緑リニ、花卉紛披ス、真ニ極楽土ナリ」(V-312)

上の文章の、とりわけ後半の部分には、久米邦武の、欧州や北アフリカの自然に対する異和感と、東南アジアの風景に対する共感、さらには日本の風土へのノスタルジーがこめられている。「頗ル我中国海ノ景ニ似タリ」という日本への郷愁をあらわにした言葉は、9月6日長崎に着き、じっさいに瀬戸内芸備の海峡を通るときには、「世界ニテ屈指ノ勝境地ナリ」とか「世界第一ノ風景ヲ過ル」といった無邪気なお国自慢となって爆発する。「航路愈^{いよいよ}東スレバ、景色愈秀麗ナリ」とは、なんとも客観性を欠く郷愁をまるだしにした言葉ではないだろうか。「極楽土」という言葉には脱亜入欧とは反対の心の動きが露呈している。

だが久米には他方で「沃土の惰俗」という主張がある。この考え方はもともと儒教的な教訓として久米の脳裏にあったものが、おそらく米欧回覧のあいだに一つの文明論として次第に明確な形をとっていったものであろう。「帰航日程」のなかでは、まずアデンの住民の生活を見た感想として次のように記されている。ここには久米の到達した結論とそこに至る久米の思考法が見事に記されているので、あえて長文を引用しよう。

「紅海ノ周囲ハ、^{しゃくきん} 鏤金^{こくねつ}ノ酷熱ニ、終年ヲ度リ、地ノ枯燥スルハ、極目ミナ^{きよくもく} 緒山赤野ニテ、年ニ數回ノ驟雨アルノミ、是ヲ以テ阿剌伯ノ生齒ハ、^{ついで} 竟ニ繁密ニ至ラサレトモ、少ク土毛ニ適スル地ニハ、諸穀菜果ミナ豊熟シ、乃チ稠人ノ村市ヲナス、^{すなわ} 亞丁港ノ如キモ、^{ちゆうじん} 黒岩ニテ山ヲナシ、^{えんこく} 白沙ニテ野ヲナシ、^{やう} 炎燄ハ^{やう} 藪カ如キ谷中ニ、^{むらが} 三万口ノ烟戸ヲ^さ 簇^さラセルヲミレハ、^さ 熱帶^さ 地方ノ肥沃ナルコトヲ^さ 察^さスヘシ、^さ 歐洲ノ^さ 各国ハ、^さ 今文明^さ 富強ヲ競ヒ、^さ 巍峨^さトシテ^さ 層樓ノ都ヲナセトモ、其地ヲ履行シ、其土民ノ生理ヲミルニ、終年屹屹トシテ、工業ヲ操作シ、日の力ヲ尽シテ已ム、然ルニ熱帶ノ地方ニテハ、其家家ノ生計タル、衣服ノ寒ニ備フルヲ要セス、家屋ノ風雨ヲ防ク覺レハ、穀果ノ又熟セルモノアリ、其生理ノ易キ、如此クナルヲ以テ、民ノ繁息スルコトモ、亦草木ト一般ナリ、然レハ、^さ 智能^さヲ^さ 勞シ、^さ 艱險ニ^さ 耐テ、^さ 事業ヲ^さ 起ス志モ、^さ 何ヲ^さ 抱トシテ、^さ 發生スヘキ、^さ 只^さ 惴然として生命ヲ保続スルに止リ、千古一日、開花ノ歩ヲ進ムルコトナク、^{きつせいきやう} 乞丐境ニ世ヲ閱シタルノミ、古ノ語ニ曰、沃土ノ民ハ惰ナリト、サレハ^{ひんじん} 貧歎ハ人ヲ富潤スルノ^{しれい} 砥礪ニテ、^{えんそく} 屢足ハ^{けんたい} 倦怠ノ基礎ト謂フヘシ、英、仏ノ文明ナルモ、其国本^{もと} 荒寒瘠薄ノ野ニテ、百物ノ欠乏ニヨリ、勤勉ノ苦ヲツミ、文明ノ光ヲ生セルナリ、同ク一ノ仏国ニテモ、北部ノ野ハ瘠ナリ、民ニ富戸多シ、南部ハ沃ナリ、民ニ惰容アリ、之ヲ推論スレハ、瑞典、^{スウェーデン} 芬蘭ノ地ハ、^{こうかく} 確陰寒ニテ、民モ亦^{つひ} 惟魯ナレトモ、皆勉強シテ、日ニ興ルノ氣象アリ、以太利、奧太利ハ、^{ほう} 豐腴温暖ニテ、開明甚タ久シキモ、驕逸シ日に衰フノ兆アリ、歐洲文明ノ列國中ニテモ、「アルプス」山脈ノ南北ヲ分ツテ、勤惰俗ヲ異ニシ、貧富從テ判セルヲミル、更ニ南方西葡ノ民ハ、是ヨリ甚タシト称ス、地中海ヲコエ、埃及ニ至リ、遂ニ^{ふだ} 亞刺比^{ひんちやう} 亞ニ至レハ、其^{せんぎやう} 窳惰ニテ^{せんぎやう} 貧陋ナル、以太利ノ如キモ、^{せんぎやう} 高ク文明ノ天ニ位地ヲシメテ、^{せんぎやう} 瞻仰スヘキヲ覺フナリ、故ニ国ノ貧富ハ、土ノ肥瘠ニアラス、民ノ衆寡ニモアラス、又其資性ノ智愚ニモアラス、^{たが} 惟其土ノ^さ 風俗、^さ ヨク^さ 生理ニ^さ 勤勉スルカノ、^さ 強弱^さ イカンニアルノミ、^さ 試ニ^さ 戦ヲ以テ例スレバ、^さ 噓馬^さ ハ^さ 巴黎^さ 一府ニス^さ キサル人民ニテ、^さ 奥、^さ 普兩國ノ兵ニ抗シテ屈セス、其武力ヲ世ニ示セリ、平時貧富ノ競ヒ、亦此ニ同シ、富沃ノ地ニ生息スルモノ、皆能此理ヲ明カニシテ、其自強ノ心ヲ鼓起セハ、其富強タル、^さ 豈^さ 勝^さ テ言ヘケンヤ、歐洲ヨリ、^さ 亞細亞ノ地ニ^さ 回航シテ、其土民ノ状ヲミレハ、此ニ感慨スルコト少カラス、」(V-273~275)

「沃土ノ民ハ惰ナリ」という、儒学者久米邦武にとっては親しい中国古典の命題は、世界の現状に照してみると、いわば南北問題というきわめて現代的なテーマを提

起することになる。久米にこの認識があったのは、特筆に値することではないだろうか。そしてこのような観点から眺めるとき、「極楽界」は惰俗と貧困の象徴に転落するだろう。久米が次に「沃土の惰俗」という言葉を使うのは、第97巻「錫蘭島の記」のなかで、まさに「人間ノ極楽界」の裏面を描くためであった。久米はゴールのシナメンガーデンを訪れた時の情景を次のように描きだしている。

「シナメンガーデン」ニ至レハ、満地ハ白沙ニテ、肉桂樹多シ、荒蕪シテ修潔ヲ欠ク、中ニ歇亭アリ、後ニ溝渠アリ、溝渠ヲ隔テテ、田野林丘ヲ望ム、水田縦横シテ丘樹狼藉シ、奇眺ニ非ス、溝水ハ底ミナ淤泥ニテ成ル、水流緩ナリ、此溝中ニ鱷魚アリ、因テ泗水ヲ禁ス、兩岸ニハ蒲葦乱生シ、其大サハ竹ヲ欺クアリ、園ノ蕪艸中ニハ、幽花嫋娟トシテ開ク、愛スヘシ、尤モ厭フヘキハ、「ゴール」近傍、村々ノ童幼、客ヲ認ムレハ、集テ錢ヲ貰ヒ、覲トシテ恥ナク、追ヘトモ亦来リ、遊覧ヲ妨ケ、殆ト堪ヘカラス、此地ノ土民、生意ノ淡泊ナル、椰子芭蕉ヲ摘ミ食トナス、此諸果ハ、終年ニ実ヲ結ビ、絶ヘルコトナシ、地ニ稻ヲウユレハ常ニ熟ス、其米ヲ土缶ニテ炊キ、漿水ヲソ、キ、手ニテ攪セ食フ、西洋「ライスカレイ」ノ料理法ノ因テハシマル所ナリ、其生活ニ易キコト如此クナルニヨリ、人民ミナ游惰ニシテ只驕陽ノ下ニ起臥シ、生命ヲ儉シ、曾テ營生ノ苦ヲシラス、児童ヲ育スルモ、逸居教ナク之ヲ放テ、客ヲ遂ヒ錢ヲ乞丐セシムルニ至ル、沃土ノ惰俗、此ニ至テ極ルト謂ヘシ、」（V-288）

ところでこのような「人間の極楽界」すなわち「沃土の惰俗」という論法は、田中彰氏が言うような「文明信仰」をあらわにしたものであろうか。田中氏は「文明信仰」という言葉を二つの局面で使っている。一つは「沃土の惰俗」にかんしてである。

「この「沃土ノ民ハ惰ナリ」を裏返した「勤勉の苦」こそが「文明」を生み、「生理ニ勤勉スル力」こそが「国ノ貧富」を規定するという文明信仰が、米欧を近代先進国とみる基準であり、それは同時にアジア、とりわけ東南アジアをみる彼らの指標でもあったのである。」（『米欧回覧実記』の学際的研究）（PP. 40-41）

私は田中氏の上の文章の全体的な判断は正しいと思う。だがそれは「文明信仰」であらうか。

田中氏がこの言葉にこめた意味が私にはよく理解できないのであるが、「信仰」というからには、理性的な判断ではない何か盲目的な崇拜を意味するだろう。だが西欧

社会の長所短所をこれほど冷静に観察してきた久米に対して、「信仰」という言葉はあたらないのではないか。じっさい、田中氏自身がフランスにかんする記述については「使節団の近代ヨーロッパ国家幻想の覚醒」を指摘しておきながら、ここでなぜ「文明信仰」がもちだされるのか理解に苦しむ。使節団にとって「近代ヨーロッパ国家」と「文明」とは一体のものであり、国家幻想から目覚めたのであれば、文明信仰もありえないからである。

また「勤勉の苦」こそが「文明」を生み「生理ニ勤勉スル力」こそが「国の貧富」を規定するというのは、むしろ久米以外の誰が言っておかしくない常識的な意見であって、それをとりたてて「文明信仰」というのは納得できない。じっさい、この論理は本文中に記されているように、中国の古典（田中氏自身の注によれば出典は『国語』巻第五魯下——第4編266ページの注（V-420）を見よ）から引かれており、第73巻「以太利国の略説」においてすでに「古語ニ曰、沃土之民情ト、比一語ハ、地球ニ通シテ、不易ノ諺トイフベシ」という形で使われている。「文明信仰」どころか儒者の「支那信仰」の表われではないだろうか。たしかに久米は極楽の沃土の情俗という矛盾に直面したが、この矛盾を深くつきつめて、この時点で決着をつけたとは思われない。

田中氏が指摘する「文明信仰」の第二の局面は、植民地と品位を欠く白人に対する久米の対応にかんしてである。これはかなり複雑な問題を含んでいるので、次節であらためてとりあげよう。

4. 東南アジア観と植民地問題——「脱亜入欧」か？

『米欧回覧実記』のなかに、後に「脱亜入欧」という言葉で呼ばれるようになった傾向を読みとって、それを最初に明確な言葉で指摘し批判したのは加藤周一氏であった。加藤氏は1961に出た論文のなかで、「『回覧実記』が近代日本の対外観を要約として余すところがない」ことを前提として、次のように述べている。

「岩倉使節団のみなかったもの、また後年の日本人が、第二次大戦後のわれわれまでも含めて、容易にみようとしなかったものは、いうまでもなく、アジア諸国である。明治政府がはじめて送った海外視察団も、第二次大戦後の日本政府が送りだした皇太子の一行の最初の外遊も、まさに「米欧回覧」であって、アジア・アフリカ諸国を除いていたことに変わりはない。もちろん1870年代にはそれらの地域には独立国はほとんどなかった。しかし使節団の船がヨーロッパから日本へ向う道に、インド人や、マレー人や、シナ人は生きていたのだ。岩倉は彼らに言及していない。寄港地で彼が視察したことは、「本国ニアリテハ勤儉順良ノ民」であるヨーロッパ人が、「其東南洋

ニ向へハ、猶暴侮ノ挙動ヲミル」ということにすぎない。ヨーロッパの「一視同仁ノ論」も国外に出れば通用しないらしいと『回覧実記』は誌している。岩倉はその理由を問わなかったし、その歴史的な意味（従ってまた日本にとっての意味）を尋ねようとしなかった。植民地化または半植民地化された諸国の内側には全く関心がなかったのだ。」（『日本人の世界像』）

田中氏は上記の全文を引用した後で、次のように論評している。

「これは重要な指摘であるが、いささか不正確といわざるをえない。使節団が「半植民地化された諸国の内側に全く関心がなかった」のは、この使節団の目的とからみだろう。たとえば、イギリスやオランダの貿易や財政について述べる場合にも、ほとんどアジアその他の植民地との関連は無視に近いかたちで記述されている。

だが、帰航路における『実記』の叙述は、その欠落させた視点にもかかわらずアジア・アフリカについて、他の類書とは比較にならないほど詳しい。」（P.39）

私はまず田中氏は上の文章のこの後半の指摘に注目したいと思う。「他の類書」をどの範囲にとるかによって議論は分れるであろうが、ヨーロッパに学んで同じコースで帰国する日本人のなかで、じっさいこれほど寄港地についてくわしく書かれたものは少ないだろう。加藤のように、「岩倉は（厳密には「久米は」と書くべきだろう）彼らに言及していない」というのは明らかに誤りであるし、また「植民地化または半植民地化された諸国の内側に全く関心がなかった」というのも正確でない。むしろ大きな関心をもっていた、というべきだろう。だがそれにもかかわらず、田中氏の言うように本国と植民地との関係についての記述が少ないことは認めなければならない。これは植民地主義や帝国主義についての認識の残さに由来すると考えてよいだろう。だがアヘン問題や欧州人の東南アジアにおける「暴侮ノ挙動」についての批判ははっきりと記されている。ただそうした記述が、列強に対する直接的な強い批判の言葉をとっていないことにかんしては、認識の深淺という問題の他に、これが政府の「公式報告書」という形をとっていることを考慮に入れなければならないと思う。『実記』は、その公刊の目的の一つは「例言」にもあるように、彼ら使節団を歓迎してくれた諸国への感謝の表明であり、またこれから条約改正の交渉をはじめる相手国を直接非難できるような性質の文書でないからである。

田中彰氏は上の文章に続いて、「帰航日程」のなかの「看過しえない重い指摘」として次の四点をあげている。(1)スエズ運河に関する記事。(2)東南アジアを中心とした自然観と文明観。(3)東南アジアの植民地問題。(4)脱亜入欧の発想。——このうち前半の(1)(2)についてはすでに述べたので、本節では後半の(3)、(4)について考えてみよう。

ここで問題になっているのは、スマトラの植民地支配を望むオランダが軍艦を派遣してアチェを幾度か攻撃するが、そのつど勇敢なアチェ人に追いかえされるエピソードを述べ、この戦いがトルコ、イギリス、ドイツなどの列強の注目するところとなっていることを記した部分で、久米はその記述のあとに次のような自説を展開している(第98巻「榜葛刺海航程の記」)。この部分は解釈が微妙なので、その全文を引用しておこう。

「弱ノ肉ハ、強ノ食、歐洲人遠航ノ業起リシヨリ、熱帯ノ弱国、ミナ其争ヒ喰フ所トナリテ、其豊饒^{ほうじょう}ノ物産ヲ、本洲ニ輸入ス、其始メ西班牙、葡萄牙、及ヒ荷蘭ノ三国、先ツ其利ヲ専ラニセシニ、土人ヲ遇スル暴慢殘酷^{ぼうまんざんこく}ニシテ、荷^{いやく}モ得ルニアリシヲ以テ、反側^{しはしは}數生シ、已ニ得テ又失ヒ、英人因テ其敵ヲサケ、寛容ヲ旨トシ、先ンスルニ教育ヲ以テシ、招撫柔遠ノ方ヲ以テ、今日ノ盛大ヲ到セリ、今郵船ニアリテ、歐洲航客ノ状ヲ目撃スルニ、英人ノ夷人ニ遇スル、頗ル親和ヲ覚フ、西、葡、及ヒ蘭ノ人ハ、概シテ暴慢ナリ、是レ昔日ノ遺俗、今ニ習慣トナリテ、除カサルヲ徴スルニ足ル^{おも}顧フニ屬地ノ夷民ハ、イカナル暴制ノ下ニ圧伏セラル、ヤシルヘカラス、之ヲ概スルニ、馬兒塞^{ばんにーさい}ヨリ郵船ニ上レハ、一船ミナ白晳^{はくせきせきぜん}赤髯^{せきぜん}ノ航客ナレトモ、亦歐洲本土ノ景況ニアラス、挙動^{そこつ}僂忽^にニテ、言語人ヲ侮慢^{ぶまん}シ、高笑ヲ発シ、婦人ニ狎^{けつ}レ、細故ヲ怒リ、暴言ヲ吐クモノ半ニアル、是ミナ本国ニアリテ、小人ノ行ニシテ恥ル^{はづか}所タリ、其間ニアリテ、些^{すこ}シク品行アルモノ、歐洲ニテ平常ノ如キモ、船中ニテハ斐然^{ひぜん}ノ君子ナルヲ覚フ、蓋シ遠航シテ、利ヲ東南洋ニ博取シ、以テ生理トナスモノハ、大抵本国ノ猾徒^{かつと}ニテ、其無賴行ナルヲ以テ、郷里^{しりや}ニ斥ケラレ、或ハ刑辟^{けいへき}ニ触レテ、人ニ交際ヲ得サルモノ、多ク出テ利ヲ外国ニ獲ンコトヲ図ル、故ニ東南洋ニ生産ヲ求メルモノハ、大抵文明国ヨリ棄テラレタル民ナリ、其同ク白晳^{はくせき}ニテ紅毛ナルヲ以テ、之ヲ文明ノ民ト思ヘハ、時アリテ差謬^{さびやう}スル甚タシ、此等ノ民、争フテ屬地ニ至リテ、其土人ヲ凌侮ス、土人ノ無知ナルモ、殆ト堪ヘサルモノアラン、殊ニ西葡ノ如キハ、其民族未タ全ク文明寛大ノ風ニ浸漬^{しんし}セサレハ、猾徒^{かつと}モ從テ多シ、蘭人ニ至リテハ、本国ニアリテハ、勤儉順良ノ民タリ、而テ其東南洋ニ向ヘハ、猶^{なほ}暴侮ノ挙動ヲミル、歐洲ノ文明^{はこ}ニ矜リ、一視同仁ノ論ヲ唱フルモ、亦未タ言フヘクシテ行ヘカラサルヲミル、我邦ノ外交日淺ク、未タ歐洲ノ情実ヲシラス、多ク其航渡ノ人ヲ視テ、本国の文明ヲ察スルヲ免レス、抑^{そもそも}西航ノ客ニモ、先品行ニ注意スヘシ、文明ノ君子ナレハ、其挙動自カラ端正温和ニテ、一面ノ際ニモ畏敬スヘキ所アリ、前文

ニアケタル挙動ノ如キハ、決テアラサルモノナリ、」(V-307~308)

加藤周一氏は上の文章を念頭において、『実記』が、「欧州の「一視同仁ノ論」も国外に出れば通用しないらしい」と指摘しておきながら、その「歴史的な意味(従ってまた日本にとっての意味)」を尋ねようとはしなかった」ことを批判している。たしかにそのような批判は可能であろう。だが維新の直後に、しかもはじめて国外に出て世界の現実を目にした人々に対して、列強に対するこれ以上の批判と植民地主義の本質的な理解を求めるのは、少し酷ではないだろうか。

田中彰氏もまた『実記』の同じ文章を念頭において、次のように厳しい批判を記している。「そこには(1)「東南洋」は利を「博取」される植民地であるという認識、(2)そこで利を得ようとする者は、「文明国」よりの棄民だ、という指摘がある。そのいずれもがヨーロッパ文明信仰に発している。」(p. 41)

たしかに、そこには「東南洋」は「博取」される植民地である、というリアルな認識がある。だが久米は決してそれが良いことであるとも、正しいことであるとも言っていない。この文章は明らかに欧州人による弱肉強食と「土人ヲ遇スル暴慢惨酷」を批判する意図で書かれており、この文章はむしろ「ヨーロッパ信仰」からの脱却を意味していると読むのが自然だろう。第二点にかんしても、たしかに植民地にやって来る日本人は文明国からの棄民であると、久米は記している。だがどうしてその指摘が「ヨーロッパ信仰」に発しているのだろうか。久米がここに書いているのは、まず第一に東南アジアに出かけてくる白人の品行には目にあまるものがあるということである。久米はすでに米欧の人間のすべてが文明化された紳士であるというわけではないという事実を米欧各国の記述で強調していたが、ここでは俗な言い方をすれば、本国では見捨てられたようなごろつきが植民地にやってくるのだという通説を、自分の体験に即して述べたまでだろう。もし海外にいる白人はみんなごろつきで、本国にいる白人はすべて紳士であると、久米が主張しているのなら、久米はそのような二分法によって本国と文明を救いだそうとしていることになるかもしれない。だが久米は、そうは考えておらず、一方で白人はすべてが文明の民であると思ってはならないと説き、他方では、東南アジアに来る白人を見て、すべての白人が同じようにごろつきだと思っはいけないと説く。きわめてバランスのとれた穏当なレトリックであり、久米は植民地における白人の「暴侮ノ挙動」を批判するとともに、そのような白人としか出会わない日本人のヨーロッパの人間に対する偏見をいましめた、と考えるのがごく自然な解釈ではないだろうか。いずれにせよ、「文明信仰」というようなものでは

ないと思う。

田中氏はさらに続けて、久米の「オランダの植民地政策を肯定する口吻」を指摘する。

『実記』は、アチェ戦争（1873～1904）にからむ新聞情報を載せ、いかにオランダがスマトラに対して理不尽な行動をとっているかを知っていた。にもかかわらず、スマトラ側への弱味をみせると「此辺属地ノ土人、常ニ其圧制ニ不満ナレバ、ミナ心ヲ生ジテ、瓦解スルニ至ルヘシ」といった。だからこそ、オランダ本国は、「力ヲ用ヒ費ヲ惜マスシテ、必ス強兵制服センコトヲ決議セル所以ナリ」（V-306）と、オランダの植民地政策を肯定する口吻で記述しているのである。」（p. 41）

私はこの解釈は違うのではないかと思う。まず田中氏は、『実記』はオランダのスマトラに対する「理不尽な行動」を「知っていた」とだけ書いて、いかにも『実記』は、知っただけで、それについては書かず批判もしていないような書き方であるが、『実記』はそれを「知っていた」だけでなくそのオランダの理不尽な行動について批判的に記述している（V-306）。そしてそのようなオランダのくりかえされた裏切りや誠実を欠く一連の態度を記した後に、その理不尽なオランダ側の論理を次のように述べる。——「荷蘭陀ハ爪哇ヲ以テ外府トナス、蘇莫荅刺ノ反側ニ、少シク弱ヲ示セハ、此辺属地ノ土人、常ニ其圧制ニ不满意ナレバ、ミナ心ヲ生シテ、瓦解スルニ至ルヘシ、是此回本国ヨリモ、力ヲ用ヒ費ヲ惜マスシテ、必ス強兵制服センコトニ決議セル所以ナリ」——オランダの圧力に対してジャワの住民はつねに不満を抱いているから、スマトラでオランダが少しでも弱みをみせれば住民の反乱が起こってオランダの植民地支配は崩壊するであろうということを恐れて、オランダはスマトラを武力で制圧しようとしている。つまりこの文章は、いくらか誇張して言えば、オランダの武力による植民地支配の論理を暴いているのであって、それを「オランダの植民地政策を肯定する口吻」ととられたのでは『実記』の筆者もうかばれないだろう。（なお、列強の植民地支配に対する久米の批判は、第93巻「歐羅巴洲商業総論」にも記されており（V-228）、そこでは列強の「メルカントイル、システム」の主義に対して、「非道」や「悪習」などの言葉が向けられている。）

田中彰氏はさらに『実記』における「『脱亜入欧』の発想」を、次のように指摘している。

『米欧回覧実記』の全巻の叙述をみれば、「東洋」と「南洋」（「東南洋」）とは明らかに区別している。日本や中国の属する前者には文明化の可能性ありとみているのであり、後者は前述のように文明の対極の地ととらえている。だから「弱ノ肉ハ、強

ノ食、欧州人遠航ノ業起リシヨリ、熱帯ノ弱国、ミナ其争ヒ喰フ所トナリテ、其豊饒ノ物産ヲ、本州ニ輸入ス」（V-307）というのである。

だが、「試ニ本邦へ輸入ノ洋品ヲ以テ、其来源ヲ究ムレハ、「カルカタ」、新嘉坡、豪期多刺利、呂宋ヨリ得テ、欧州ニ於テ化治セルモノ多シ」と述べる。日本の輸入する舶来品の原料は東南アジアにあるものというのである。そして「今日本ノ民、方ニ外航ノ緒ヲ、西洋人ヨリ誘啓セラレ、争フテ欧州ニ赴キ、而テ印度南洋ハ、眼孔中ヨリ脱去シタリ」（V-301）という。

それはまさに「脱亜入欧」の発想にはかならない。」（pp. 41～42）

私はこの文章を読んでわが目を疑った。そしてくりかえしテキストを読んでみたが、どうしてこのような推論ができるのかよくわからない。まず、田中氏の前提を正しいとしよう。『実記』は「東洋」と「南洋」を区別し、日本や中国のような「東洋」は文明化の可能性を認めているが、「南洋」は文明の対極の地と考えている。—だが、どうしてそれが「脱亜入欧」につながるものであろうか。田中氏が上の文章に続いて言及している福沢諭吉の「脱亜論」の「亜」は、言うまでもなく隣邦の支那と朝鮮を指しているのであるから、ここで「脱亜」の語を用いるのは正確でない。また仮に「南洋」を「亜」であるとしても、『実記』がはたして「南洋」の文明化の可能性を否定しているのかどうか、これはさらに論証を必要とするところだろう。「沃土の惰俗」説自体は、かならずしも「南洋」の文明化の可能性を否定するとはかぎらないし、また久米が文明化を人類の幸福とみなしていたかどうか、さらに議論を必要とするところだろう。じっさい田中氏が「だから」として次に引用している「弱ノ肉ハ、強ノ食、欧州人遠航ノ業起リシヨリ」以下の文章は、すでに述べたように、オランダやヨーロッパ列強の理不尽な行為を批判している文章であって、どう考えても、「南洋」が文明の対極の地であることを証明するための文章ではない。

また上に引用した田中氏の文章の後段に引用されている『実記』の文章のうち、第一のものは、日本人が舶来品としてヨーロッパ産だと思いこんでいるものが実は「南洋」原産であることを教えるものであり、第二は日本人の関心が欧州ばかりに向って「印度南洋」が脱落していることをいましめる、いずれもまさに「脱亜入欧」をいましめる文章である。

ところが田中氏によれば「それはまさに「脱亜入欧」の発想にはかならない」のである。しかも田中氏の論理はそこで止らず、『実記』における東南アジアの物産の豊かさや東南アジアとの貿易の必要性を説く文章を引用して、それが文明化した日本の「東南アジア資源への着目」であり、日本の「富強」化のための「アジアの資源支配

の論理の創出」であり、「これこそアジアにおける近代日本のあり方の予言というべきかもしれない」というところにまで突進する。

『米欧回覧実記』の他の部分にかんしては、冷静で正確な田中氏の分析が、東南アジアに至ると、何故このように性急で論理の飛躍が目立つのであろうか。ここには、「脱亜入欧」という歴史的な重い事実にかんする歴史家の責任についての田中氏の深い反省と強い思い入れと感じとられるのであるが、同時に久米の記述が、近代日本の発展にかんする田中氏の図式に無理遣り押しこまれ裁断されているという印象を、私はぬぐいきれない。

かつて田中氏は、プロイセンを「特別の国」とみなす加藤説に対して、明治10年代の岩倉や伊藤の天皇制国家のイメージを明治初期のこの時代に投影する時代錯誤をいましめて、次のように書いた。

「以上のような、これまでみてきたプロセスをぬきにして、明治10年代における岩倉具視や伊藤博文らのプロシアを下敷きにした近代天皇制国家の形成プランから、逆にこの使節団の時点の、日本とプロシア、木戸、大久保とビスマルク・モルトケをあまりにもぴったりと重ね合わせて、使節団の関心が当初からプロシアを「特別視」していた（例えば、前掲加藤論文、236頁）と解することは慎しみたい。」（『岩倉使節団とプロシア』（5））

これは『実記』を読む場合に忘れてはならない、まことに適切な忠告である。だが東南アジアに関しては、田中氏自身がその過ちをおかす結果になっている。

5. 見落されてきたもの——『米欧回覧実記』における世界のイメージと「貿易」

『米欧回覧実記』を「脱亜入欧」というような戦後歴史学の固定観念で読んでしまつてはならないと思う(6)。1年8カ月にわたる米欧回覧の後にアジアやアフリカを見る使節団の眼は、たしかに西欧化され文明化されているだろう。したがって彼らが多少とも西欧人の目でアジアやアフリカを見ているということは十分に予想される。だがそれをただちに「脱亜入欧」と言ってしまうのは性急にすぎるだろう。もともと彼らは東洋の目で西洋を見たのである。久米の記述を注意深く読めば、「沃土の情俗」の場合がそうであったように、重要な記述の背後には、必ず中国の古典がある。それは政治的思想的な文章に限らず紀行文や美的叙述においても同様である。久米は最後まで、儒教的な論理と倫理と感性を保持している(7)。文明化された儒学者とでも言えようか。だが久米のこの儒教的な論理と感性は、自国以外の文化や社会をとらえる際に驚くほどの柔軟性と効力を発揮しえたのであった。われわれが『実記』を読んでまっさきに感嘆するのはその点である。

「帰航日程」の56日はそのことを知るうえでも特別に興味深い期間であった。なぜなら久米はその間、日本への郷愁の高まるなかで、文明の裏面とも言うべき、アジアにおける西欧文明の現実の姿を目撃して、多少とも脱欧化を固りつつあると同時に、東南アジアの社会と西欧の社会との落差を思い知らされずにはすまなかったからである。ここで「脱亜入欧」という言葉にこだわるならば、彼らは脱亜にして入亜、入欧にして脱欧というさまざまな思いと考えが交錯するなかで、自らの結論を下し、世界のイメージを完成させなければならなかった。その意味で、「帰航日程」は『実記』の「総論」であり、「^{つた}り」どころではなく、結論の部であったと言ってよいだろう。

その結論が何であったかにかんしては、さらにくわしい論述が必要であろう。もはや紙数が尽きたので、私は最後に、田中氏の視角からは見えにくい、私には最も重要に思われる一つの事についてだけ記しておきたい。『実記』が最も重要視しているものは何か。私は「貿易」だと思う。そしてこれはフルベッキの提示した49項目のなかには含まれていない。また「貿易」は田中氏の論述の視野の中にありながらも、田中氏はそれに特別な注意を払わず、その意味を正面から問おうとしていない。

じっさい田中氏が『学際的研究』の総論で引用した『実記』の叙述の多くは「貿易」にかかわるものである。例えば田中氏が、「イギリスについては岩倉使節団の結論は次の一節に尽きる」(p. 22)として引用した次の文章。

「此国ノ幅員、人口、位地ノ、我日本ニ似タリトテ、其營生図利ノ目的ヲ学ハントスルモ、未タ得ヘカラス、故ニ英国ニ觀察シテ、感觸ヲ我ニ与フル所、亦甚タ親切ナラス、只倫敦ハ世界天産物ノ大市場ナルヲ以テ、農利天産ニ富ム国ニ於テハ、其貿易ノ景況ニ深ク注意スヘキハ、方今緊要ノ一ナルヘシ、内部ノ政治、国民ノ景況ニ於テハ、未タ我ニ緊要ナル所ヲミス」(Ⅱ-384~385)(傍点西川)

またこれも田中氏が部分的に引用しているロンドン、パリ、ニューヨークについての記述。

「倫敦、巴黎、及ヒ新約克ハ、世界三大貿易都府ト称スレトモ、其趣キ自ラ別様ナリ、米國ノ貿易ノ主意ハ、固^{もと}リ欧地ニ異ナリ、倫敦ハ世界ノ天産ヲ輸入シテ、自國の製作力ヲ加ヘテ、再輸出スルヲ主意トス、故ニ之ヲ世界天産物ノ市場^{ちやうばく}ナリと名クヘシ、巴黎ハ之ニ異ナリ、欧州工芸ノ地ニテ、流行ノ根元ナレハ、之

ヲ世界工産物ノ市場ト名クヘシ、将来日本ニ於テ、欧米輸出ノ途ヲ開カンニハ、此ニ注意ヲナスコト緊要ナルヘシ」(Ⅲ-58-59) (傍点西川)

上の文章では、日本の欧米に対する輸出を「緊要」のことと考えていることが明記されていて興味深い。次の文章ではさらに「地球」という文字が使われ、「地球時代」の認識が久米にあったことを思わせる。これも田中氏が「以上の米・英・仏を『実記』では次のように要約する」(p. 25)として引用している部分である。

「已ニ米國ヲ評スルニ、欧州ノ開拓地ヲ以テシ、英國ヲ世界ノ貿易場トシ、仏國ヲ欧州ノ大市場トセリ、此三大國ハ、地広ク民多ク、其營業ノ力ハ、常ニ滿地球ニ管係ヲ及ホス雄國ナルコト、其記実ヲミテモ、益々著明ナルヘシ」(Ⅲ-165)

この文章は実は、第49巻「白耳義國總説」の冒頭に置かれた文章であって、「小国」であるベルギーとオランダが「世界貿易ニ於テモ影響ヲナス」ことの意味に注意をうながすための導入部である。当然オランダにかんしても「貿易ノ業ニ長セルコト、欧州各國中ニテ第一ナリト謂ヘシ」(Ⅲ-227)とあり、貿易は最大の関心事である。だが貿易にたいする関心はとりわけ「帰航日程」において際立っている。それは「帰航日程」の多くが寄港地にかんする記述である以上、当然なことではあるが、それにしても貿易にかんする記述は他のさまざまな項目にかんする記述よりも力がこもっており、それに割かれたページ数も多い。例えばカルカッタの場合である。『実記』が寄港地でもないカルカッタについてくわしく記しているのは、明らかに貿易にたいする関心からである。

「○此府ヨリ輸出ノ産物ハ、鴉片ヲ魁トス、皆支那ニ輸送ス、支那國ハ、全地ノ民、周年ノ勞力ヲ傾ケ、此一品ヲ買得テ、精神ヲ麻痺スルコトニ、勉強スト謂フヘシ、英國モ亦此不祥ナル利益ヲ受ケテ、自ラ肥ル、豈ニ文明ノ本意ナランヤ、蓋積習ノ後、支那ハ買者ヲ制スル能ハス、英國モ売者ヲ禁スルオ得サルナリ、烟草ノ産出ハ、呂宋ニ匹ス、其高約十五万担ニ及フ、砂糖ハ、三十万担、…」(Ⅴ-299)

上の文章はこのあと、「藍靛〔インディゴ〕ハ……、稻米ハ……」とあり、さらに

大麻、^{いちぢ}苧麻、棉花、絹糸、茶〔「アズサム」茶〕などの輸出の産物の記述が続き、最後は主としてイギリスからの輸入品として、麻布、^{アムコー}鉋物、書籍、酒、火酒、毛織物、木綿、絹帛、等の加工品があげられている。そしてこの交易の現状から、「日本ニ於テ緊要ナリトスルハ、^{あらぬのぶくろ}籠布袋ノ製作ナリ」とか「日本ノ茶利ヲ振興スルニハ、此地ノ景況ヲ、常に照査セルヘカラス」といった教訓が引きだされるのであるが、久米はそれだけで満足できず、一段落下げた文章で（つまり自分の意見として）次のような貿易論をつけ加えている。

「東西洋ノ航路ハ、殆ト一万海里、日本ヨリ程ヲ数ヘ起セハ、横浜ヨリ神戸、長崎ニ小停シテ、上海ニ赴キ、或ハ南海ヲ^{きり}截テ、香港ニ達ス、支那南部ト物産ヲ交易スヘシ、香港ヨリ南ハ、^{シンガポール}新嘉坡ニテ、南洋熱帯ノ物産ヲ交易スヘシ、此ヨリ起航シテ、南ハ爪哇、豪斯多刺利ヘノ郵船アリ、西ハ錫蘭「カルカタ」ヘノ郵船アリ、印度ノ物産ヲ交易スルハ、「カルカタ」ヲ要口トス、「カルカタ」ヨリ九百英里ノ鉄路ヲ走り、孟買府ニ至レハ、蘇士ノ郵船アリテ、歐洲ニ航スヘシ、天ノ^{こうしよ}嶼^{あんぱい}嶼ヲ按排スル、熱、中、寒ノ三帯ニ、各其土宜アリ、各国域ヲ異ニシテ、生意徒テ異ナルハ、天ヨリ貿易ノ利ヲ生民ニ与ヘテ、相競ヒ相勵マシムル所ニテ、深ク注意セサルベカラサルナリ、^{こくみ}試ニ本邦ヘ輸入ノ洋品ヲ以テ、其来源ヲ究ムレハ、「カルカタ」新嘉坡、豪斯多刺利、呂宋ヨリ得テ、歐洲ニ於テ化治セルモノ多シ、今日本ノ民、^{よこ}方ニ外航ノ^{いとぐち}緒ヲ、西洋人ヨリ誘啓セラレ、争フテ歐洲ニ赴キ、而テ印度南洋ハ、眼孔中ヨリ脱去シタリ、殊ニシラス、国民ミナ貿易ヲ勉メ、工芸ヲ興スハ、未タ歐洲ニ至ラサル半程ノ地ニ、利益ノ伏藏スル甚タ夥多シキヲ、紫檀、黒檀ノ材ハ、^{シムロ}暹羅、^{シモグ}蘇莫荅刺ニ出テ、象牙及ヒ藤ハ、安南ニ出ルカ如ク、天産ノ豊ナル、反テ近隣ノ諸邦ニアリ、今ヨリシテ以往、西航ノ人、新嘉坡ヨリ「カルカタ」孟買ニ赴クモノ、年年ニ盛ンニシテ、其地理物産ヲ記スル、此米欧実記ノ如キモノ、森出スルニ及ンテ、始メテ日本富強ノ実ヲミルヘシ、因テ^{しばら}姑ク両府ノ大略ヲ記シテ、其^{こうし}嚆矢ノ人ヲマツ、」(V-300~301)

『米欧回覧実記』と、とりわけこの「帰航日程」がなぜ書かれる必要があったかを説明する、使命感にあふれた文章である。田中彰氏によれば、「これは「脱亜入欧」の否定ではない。むしろ「脱亜入欧」によって文明化する日本の東南アジアの資源への着目であり、……」(p. 42)ということになるのであるが、前節で述べたように私にはこの田中氏の解釈はやはり無理であり、後の富国強兵成った日本政府のイデオ

ロギーを久米邦武と『実記』に押しつけるアナクロニズムに思えてならない。じっさい、久米の記述のどこを読んでも、西欧列強と同じ論理を用いて東南アジアの富を収奪すべきであるといった記述は見当たらない。また『実記』で用いられている「富強」はいわゆる「富国強兵」とは異なる。ここでは商業あるいは交易というコンテキストの中で用いられていることからわかるように、むしろ平和主義的なものである。『実記』の不思議の一つは、国民国家の最も重要な装置であるべき強大な軍隊への関心の希薄なことである（『総論』には軍隊の項目がない）。『実記』における関心のもち方は、どちらかと言えば、技術的な関心であり、大国の軍隊よりは小国の、北欧やスイスの防衛的な軍隊（『帰航日程』ではオランダ軍の侵略に対するスマトラの兵士たちの誠実と勇気）にあった。

「富国」にかんしても、『実記』の場合は重工業を中心にした近代的な産業よりも、手工業や商業、とりわけ貿易に関心が集中している。これは欧州「総論」において明確に表われている特色であって、久米はとりわけ全ヨーロッパの道路や運河などの交通に注目して、それを人体の静動脈にたとえている。「富強」の根源は交易なのである。このようないわば貿易立国論は『帰航日程』においてもくりかえし述べられている。むしろ久米は『帰航日程』において、世界が交易によってつながれていることを実感できたのである。貿易に注意をうながすことによって、久米はまさに、世界周航によってついに獲得しえた世界のイメージ、交易の網目に覆われた地球時代の到来を説いている。久米は文明の本質を貿易（広義の交通＝コミュニケーション）でとらえたと言ってよいだろう。香港における次の文章を読んでいただきたい。「東洋ノ政府ハ、貿易ニ注意薄キノミナラス、却テ之ヲ妨害シ、自ラ国勢ヲ衰滅セシムル」と記した後、久米は次のように自説を展開する。

「支那ノ古代、羅馬^{ローマ}ニ交通セルコト、已ニ羅馬ノ記ニ載ス、広東ハ、其頃ヨリ南海西洋ヘ交通ノ口トセシコト、猶我筑紫ノ韓唐ヘ交通セルニ同シ、古^{いにしへ}ヘ南海ノ明珠、或ハ日南珠ノ称アリ、是ハ広東ニ真珠ヲ出セルニアラス、西洋南洋ヨリ瑠璃^{るり}、水晶^{さんご}、珊瑚^{さうご}、玫瑰ノ類ヲ持来リ、此地ニテ交易セルヲ、中土ニ分播セルナリ、其後中世ニ至リ、広東ノ交易モ、漸ニ衰ヘタリ、杜詩ニ所謂ル越裳翡翠無消息、南海明珠久寂寥^{せきりょう}トイヘルカ如シ、如此^{かくのごと}キコト殆ト千年ノ久キヲ経テ、葡萄牙人、再ヒ支那印度ノ船路ヲ通シ、澳門〈即阿馮港〉ヲ以テ埠頭トナシテヨリ、東西洋ノ貿易ハ、再ヒ興レリ、我邦ノ近古ニ、阿馮港ヲ葡萄牙、呂宋ヲ西班牙ト看做シ、南蛮ノ称ヲアタヘタリ、因テ西洋輸入品ヲ南蛮ノ物産ト思ヒ、南蛮鉄ナ

ドト名ケシハ、実ハ西洋鉄ヲ南島属地ヨリ輸入シタルナリ、広東人ヨク海外ニ航ス、東ハ「カリホーニヤ」ヲ金山ト称シ、南ハ豪斯多刺亜ヲ新金山ト称シ、其他新嘉坡、馬尼刺、安南、ハタビヤ〈爪哇〉等ニ、支那人甚タ多シ、内地ニ於テモ、能西洋ノ物件ヲ模作ス、広東府ニ於テ、種類ノ製作場甚タ多シト謂フ、古昔ハ西洋ノ物品ヲ目シ、日南珠、南蛮鉄ナト、謂シモ、今ハ又広東ノ物品ヲ執ヘ、西洋舶来品ト謂モノアリ、其支那製ナルヲ知ラス、凡貿易物産ニ注意薄ケレハ、百事此ニ類スルコト多シ、陶器ヲ瀬戸物ト呼ビ、備前陶ヲ伊万里焼トイヒ、越後苧、八丈島、筑前蠟ノ類、内地ニテモ、確ト出処ヲ知ルモノナシ、況ヤ国民、親ヲ足ヲ挙テ、国境ヲ離レ、外国ト交易スルヲ知ラス、外国ノ地理物産ヲ詳ニセサルモノハ、殆ト群盲ノ古器ヲ評スルニ似タリ、亦何ソ貿易ノ利ヲ興スニ足ラン、今ヤ操舟航海ノ業、年ヲ遂テ開ケ、貿易ノ道ハ、世界必要ノ務メタリ、地理ヲ講シ、民俗ヲ察スル、最モ物産ニ注意シ、其原由ヲ繹ネ、進歩日新ヲ計ラサルヘカラサルナリ、」(V-327~328)

上の文章は、筆者の久米邦武が鎖国の時代に育った人間であることを、われわれにあらためて思いおこさせる。だが久米が最初の海外旅行で獲得した世界のイメージは何と今日的であろうか。富国強兵や脱亜入欧と岩倉使節団とのかかわりを注意深く見きわめることは必要である。しかしながら帝国主義論的なバラダイムを押しつけることによって、はじめて世界周航をはたした明治初期の知識人のメッセージを見落すことがあってはならないと思う。

注

- 1) 大久保利謙編『久米邦武の研究』(「久米邦武著作集」別巻、吉川弘文館、1991年)
- 2) 久米邦武の自筆履歴書の分析、大使事務局における久米の任務やその後の執筆過程などの詳細にかんしては近く発表される、福井純子『「米欧回覧実記」の成立』(19世紀ヨーロッパ文化研究会・西川長夫、松宮秀治編『1870年代の世界と日本—久米邦武編「米欧回覧実記」を読む—』(仮題)法律文化社、所収)を参照されたい。
- 3) 村田陽一訳「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」(国民文庫)
- 4) 『加藤周一著作集』第七巻「近代日本の文明史的位置」(平凡社)
- 5) 『現代思想』1976年4月号、175ページ。
- 6) この点にかんしては丸山真男『「福沢諭吉と日本の近代化」序』(「みすず」1992年10月号)を参照されたい。私は丸山真男のこの文章に対して批判的な意見を書いた

（「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』1993年5月号）が、この固定観念が戦後歴史学の視野を歪ませ、盲点を作り出したのは確かだと思う。

- 7) この点では私はマリーン・メイヨの説に賛成したい。（芳賀徹，斉藤恵子訳「岩倉使節の西洋研究」大久保利謙編『岩倉使節の研究』宗高書店，1976年，所収）

※『米欧回覧実記』からの引用は，すべて岩波文庫版（久米邦武編・田中彰校注）による。（ ）内のローマ数字はその巻数を，算用数字はページ数を示す。